

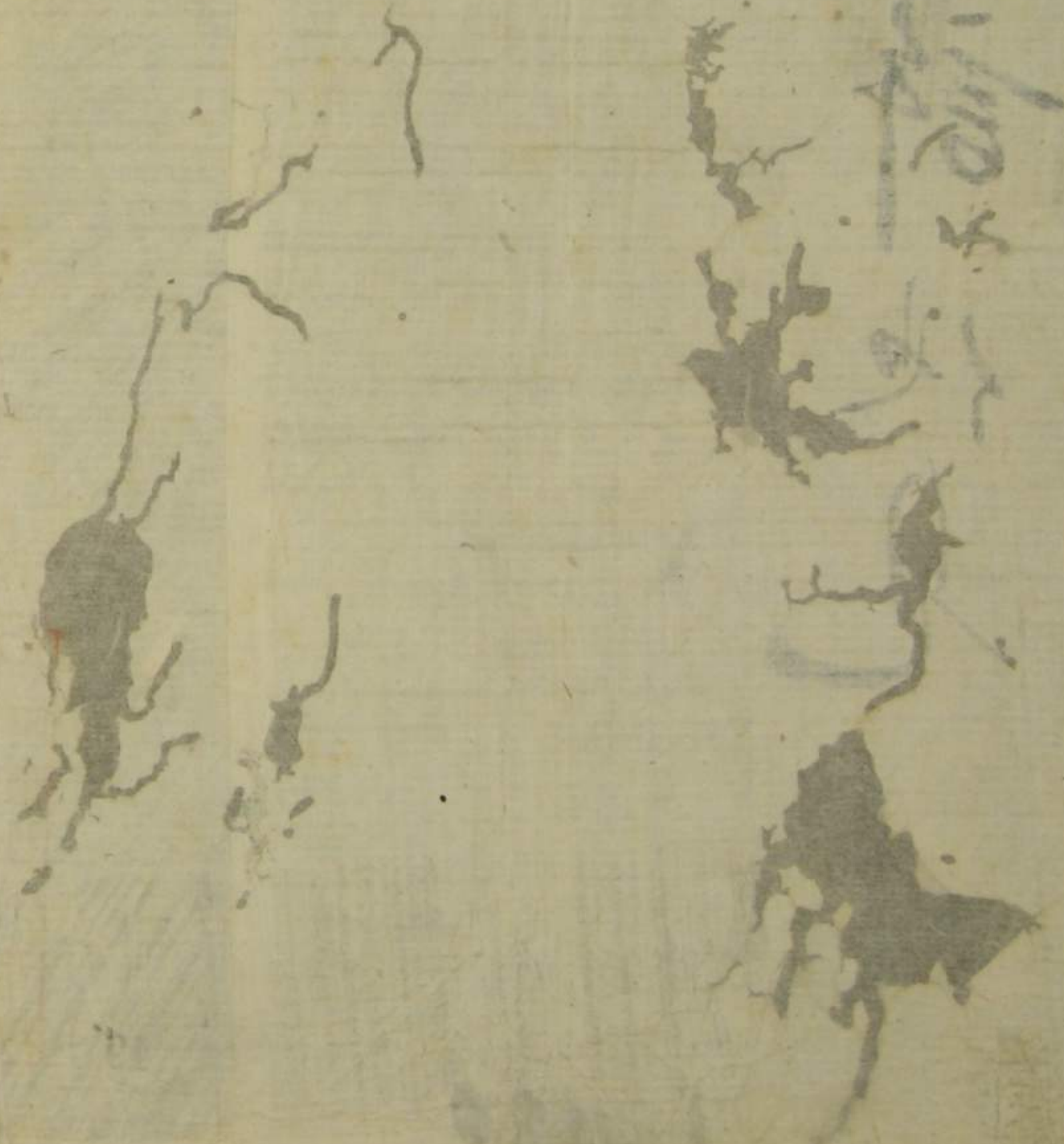
利
A 169

謹
議

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

[Faint red seal impression]

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]



大正十一年四月
大正侯爵郵寄贈

臣有用嚮ニ罪ヲ陸軍ノ要路ニ待ツ自省ルニ資



性謙劣大任ニ當ルニ足ラス誠ニ恐ラクハ

聖明付托ノ重キニ背ク有ンヲ日夜恐懼自安セ

ス是ヲ以テ屢辞表ヲ上リ纒カニ聽カルヲ得

而シテ

聖恩洪大罪責ヲ加ヘス猶武弁ニ列シ顯職ヲ辱フ

ス感激ノ至自謂フ汗馬ノ勞以テ萬一ニ報スル

有ント頃者遽カニ 闕庭ニ召サレ再タヒ前任

ノ重キヲ奉ス可キノ 命ヲ得タリ惶懼ノ至為
ン所ヲ知ラス唯 嚴命ノ道ル可ラサルヲ以テ
姑ク拜受スト虽凡平昔志願ノ在ル所必其人ヲ
待ントス夫レ既ニ其職ヲ奉スレハ其責現ニ免
ル可カラズ道ル可ラサルノ 命ニ當リ免ル可
ラサルノ責ヲ擔フ一日モ目的ヲ立テ方向ヲ定
メサルヲ得サルナリ夫レ兵ハ國ノ大事廢興存
亡ノ関スル所ト古人既ニ至言アリ維新更張

皇威四震シ大慙深ニ服スト雖凡終カニ能機ニ
投シ蕭牆ノ禍ヲ艾除スルニ過キス未タ武以テ
四裔ヲ服シ威以テ八紘ヲ壓スルニ足レリト謂
フ可ラス況ヤ方今兵制一變慶元以還ノ舊法既
ニ用フ可キニ非ス豨突猪勇一モ施ス可キ所ナ
キヲ故ニ戊辰ノ歲制度一新兵部衙門ヲ置キ
以テ海陸軍備ヲ統轄シ西洋兵法ヲ講習セシメ
以テ更ニ皇張スルヲ有ントス時ニ天下創メテ

僊武ノ安キニ就クヲ以テ臣西洋諸國ニ遊歴シ
窺カニ以テ彼己両知ノ策ニ備ヘントス臣カ嘗
テ聊汗馬ノ勞アレヲ以テヤ歸朝以來陸軍將
校ノ後ト從フヲ得嘗時兵燹ヲ大改ニ開キ事頗
ル緒ニ就クニ似タリト雖モ未タ兵制ノ規模ヲ
定ムルニ暇アラヌ既ニシテ海陸分省規模ヲ立
ルノ端ヲ開ク而シテ臣亦累リニ寵命ヲ奉シ
此際ニ拮据ス繼テ佛朗西ノ教師ヲ延招シ訓練

調操ヨリ傍ハラ陸軍ノ定制節目ニ至ルマテ事
頗緒ニ就クニ似タリ然リト雖モ兵備ノ立テ兵
勢ノ振フニ至テハ猶數年ヲ期スルニ非レハ能
ハス抑兵法ノ要ハ一奇策一奮戰ノ以テ敵ニ克
ツアムヲ恃ムニ非ス全體ノ強節制ノ嚴以テ敵
ノ我ヲ侵ス能ハサルヲ恃ム耳今一奇策一奮戰
ノ纔カニ能敵ヲ羈絆スルモ全圖ノ立サル後備
ノ繼サル恐ラハ王者膺懲ノ典ニ協ヘリト謂フ

可ラス故ニ臣志ノ存スル所ハ規模ヲ開宏ニシ
實地ニ練磨シ真ノ盛大ヲ致シ以テ有爲ノ秋ニ
備ヘントスルニ在リ方今四海幸ニ閑暇ナリト
雖厄峩羅斯ノ境我カ北邊ニ接シ其志ノ測ル可
ラサムハ举世知ル所ナリ今ニ迨テ牖戸ヲ綢繆
セス亦將ニ何レノ日ヲ期セントスルヤ西洋諸
國ノ如キハ締交親密今俄カニ干戈ノ患ナシト
雖氏一旦變アリ強弱懸絶ナラハ白旗ヲ軍門ニ

表セサルヲ得サルニ至ラン是誠ニ臣カ部事ニ
於テ日夜痛心スル所一タヒ之ヲ思ヘハ鍼ノ胸
ヲ刺スカ如シ故ニ兵備ノ立テ兵勢ノ振フヲ望
ム帝一日千秋ナラサルナリ外邦交際ノ事ニ至
テハ臣カ部事ノ関スル所ニ非スト雖氏往々聽
ク所ヲ以テスレハ獨立ノ體既ニ立テ匹敵ノ權
或ハ缺クル所アリト抑内地旅行雜居教法等ノ
事件ニ至テハ勢ノ至ル所必ス今日ヲ以テ準繩

トス可ラサル者アラントス國家若シ兵威ニ於
テ屈スル所アラハ使臣縱ヒ正富弼カ如ク辯辭
生カ如キアルモ彼ヲ致スノ勢ナカラントス今
苟モ之カ侮ヲ禦カント欲セハ則一奇策一奮戰
ノ能為ル所ニ非ス必ス小憤ヲ忍ヒ大義ヲ思ヒ
膽ヲ嘗メ薪ニ坐シ以テ異日兵備ノ立テ兵勢ノ
振フヲ待タサルヲ得サルナリ所謂兵備ノ立テ
兵勢ノ振フハ必其基礎ヲ堅ウシ漸次以テ進歩

シ之カ歲月ヲ期スルニ非レハ能ハサルナリ且
ソレ方今天下一家四海一國固ヨリ離朽ノ患ナ
シ而シテ内治財政司理文教各其方ヲ得各其施
設ノ宜シキヲ極メタリト雖ヒ民ノ知識未タ悉
ク開明ナリト謂フ可ラス民ノ情實未タ悉ク疏
通セリト謂フ可ラス民ノ産業未タ悉ク安富ナ
リト謂フ可ラス民ノ疾苦未タ悉ク驅除セリト
謂フ可ラス凡ソ此等ノ事亦歲月漸磨ノ功ニ非

レハ能ス可ラサル者ナリ是^臣カ部事ニ非スト
雖モ國ノ強弱ヲ論スレハ獨リ兵威ノミナラス
亦皆爰ニ基セサルハナシ故ニ此等ノ庶績咸熙
マルノ際ニ至ラハ^臣カ部事ニ至ラモ亦肩ヲ比
シ踵ヲ接シテ相助クルコト有ニ國家既ニ此隆
盛ヲ致シテ真ニ其力ヲ有スルニ至ラハ則何ヲ
為シテ成ラサラン何ヲ欲シテ得サラン是^臣カ
日夜企テ、望ム所ナリ今ソレ^臣カ部事ニ於テ

兵備未タ立サル者四ツ曰ク將校膽勇アリ智謀
アリ然レモ學術ニ至テハ猶數年ヲ期スルニ非
レハ能ハサルナリ曰ク兵卒氣魄アリ奮力アリ
然レモ節制ニ至テハ猶數年ヲ期スルニ非レハ
能ハサルナリ曰ク器械備ハラサルナリ夫レ方
今用兵ノ法器械ノ力ニ資スル誠ニ大ナルハ人
皆知ル所ナリ而シテ銃砲諸具ノ製造未タ緒ニ
就クト謂ヒ難キ者アリ今縱ヒ緒ニ就クアルモ

數年ヲ期セサレハ精疏巧拙ヲ論ス可ラサルナ
リ曰ク邊海防禦ノ方法砲臺城堡ノ設未タ立サ
ルナリ夫レ内ニ憂無シテ然後以テ外ヲ謀ルヘ
シ今沿邊海防守禦ノ策未タ立ス策既ニ立ツモ
土木建築ノ事一時ニ施ス可ラス是亦數年ヲ期
セサレハ厚薄堅脆ヲ論ス可ラサルナリ凡此數
ノ者ハ唯速成ヲ要スルノ不可タル耳ナラス必
ス歲月ノ功ヲ積ムニ非レハ爲ス可ラサル者ナ

リ今誠ニ期スルニ歲月ノ功ヲ以テシ費スニ巨
萬ノ財ヲ以テシテ事ヲ執ル者汲々勉勵止ム無
キ時ハ其功ヲ竣ムルモ豈難シト爲ンヤ是臣カ
素衷ノ在ル所陸軍兵備ノ立チ兵勢ノ振フヲ他
日ニ期シテ一日千秋膏ナラサル所ナリ是ヲ以
テ曩者大使ノ發スルヤ臣嘗テ建言シテ方略時
機ヲ論ス臣カ期スル所兵備ノ立チ兵勢ノ振フ
ニ在ルヲ以テナリ臣素ヨリ卑賤稍長シテ旗鼓

ノ事ニ從ヒ嫺雅辯論文法ニ拘束スルハ臣カ好
ム所ニ非ス今一方ノ任ヲ受テ銳ヲ衝キ陣ヲ陷
レ驍武以テ自ラ顯レシハ豈願フ所ナラサラン
ヨ顧フニ輕舉躁動ハ今日ノ宜シキ所ニ非ルナ
リ故ニ持論頗ル武臣ニ類セス果敢ヲ欠クカ如
シト雖ヒ誠ニ兵ハ國ノ大事廢興存亡ノ関スル
所ナルヲ以テ敢テ小憤ヲ忍テ大事ヲ襄ント欲
ス是臣區々ノ志ナリ頃者臺灣生蕃ノ事起リ臣

復之シキヲ前任ニ承ク廟廊ノ深謨社稷ノ宏圖
ニ至テハ臣カ敢テ窺ヒ知ル所ニ非スト雖ヒ臣
カ從來ノ持論ヲ以テ之ニ較スレハ極メテ其不
可ナルヲ知ル且今繼ヒ一時僥倖ニシテ成ル
アルモ國家養兵ノ全局ニ就テ之ヲ論スレハ一
時將校ヲ擧テ一時兵員ヲ増ス速成ヲ欲スルノ
弊却步ヲ招ク耳ナラス 朝廷必其弊ヲ制スル
ニ堪サル者アラン是ヲ以テ嚮ニ書ヲ 内閣ニ

上リ敢テ進止ヲ取ル唯 嚴命犯ス可ラサルヲ
以テ姑ク職ヲ奉ス職ニ在ル一日ナレハ則一日
ノ責アリ是ヲ以テ苟クモ事務ニ服スト雖成
敗利鈍臣安ンク之ヲ燭スルヲ得ン謹テ上言シ
臣カ本意、在ル所ヲ明ニス願クハ

陛下臣カ不能ヲ憫ニ裁定スル所アラントテ誠惶
誠懼頓首頓首謹言

明治七年七月

陸軍中將兼陸軍卿山縣有朋

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

臣有朋謹言今日國家之事遂之至之痛哭流涕亦及フナシ 神武創業二千五百有餘年ノ天下日本生靈三千萬ノ期望一朝ニシテ岌々ノ危キニ至ル豈ニ痛憤ノ至リナラスヤ 臣等何ノ面目アリ亦 祖宗ニ地下ニ見ルニ死セシ天壤容ル所ナシ然レ事既ニ爰ニ至ル生シ萬死ノ際ニ求ルノ外別ニ他策ナシ 臣既ニ職ヲ陸軍ノ總務ニ奉ス縱ヒ己カ素衰ノ許ス可ナラモ此際ニ至リ亦謹責ノ辭ニ可キ莫シ 今ノ計ヲ為スニ唯ニ策アルノニ其第一ハ蓋シ事既ニ遷キニ屬スルモ猶或ハ及フキアラシニ廟鎮決然臺澎ノ兵ヲ引キ我カ

生靈ノ罪ヲ討スル彼罪ニ服シテ止ム別ニ他故ナキ
ツ以テシ外務ノ應接ニ頼テ其後ヲ收調ス如此クナ
レハ事或ハ罷ムニ近カラシト案ニ清國必ス開釁ヲ
欲セス唯事理止ム可クナリ一因テ勢爰ニ至ルアラント
ス故ニ我既ニ師ヲ引ク得必ス大軍ヲ興シテ我ヲ討
スルニ至ラス即チ得我相搆スルモ猶以テ後ヲ謀ル
ニ足ル是ハ策ナリ然レ此策既ニ時機ヲ失スレハ
則チ徒為ニ属スレ其策ハ我討著ノ兵
ニ合シテ引レシムモ既ニ機ヲ失シテ清ト兵ヲ搆ス
ルニ及ビ我前綽ヲ踵ミ居セスニ廟議ヲ決シテ

清ト釁ヲ開クニ在リ如此クナラハ臣請フニ教萬
ノ兵ヲ平チ江ノ縣ヲ蹂躪シ機ニ乘シテ直隸ニ上ラン
唯事ノ成敗利鈍ニ至テハ必ス期ス可クナル者アリト
雖レ三教萬ノ兵ニ舉グニシテ職ク可キニ非レハ願ル
時日ヲ遷延スレ而シテ廟堂外諸國トノ交際間ニ
於テ交和居間等ノ策ヲ施スニ庶幾ハ聲虜煽シ預
スコトナク事止ムニ至レシ若シ事ニシテ我果シテ勢ヲ
得ルコトアラバ直チニ天津ヲ交キ我城下ノ盟ヲ要センノ
ミ其外兵ニ逼レ處ニ至ラハ臣素ヨリ胸算アリ爰ニシテ論
セス其策ニ策ハ事爰ニ出テス次然則釁ヲ開ク能ハ

不苛且以ヲ援兵ヲ寄望シニ在リ是事ノ尤姑息
ニ出ツル者果シテ如此クナラハ國空何ヲ以テシニ其微
何ノ時ヲ振ン臣寧ロ 然ラモ事ヤルナリ今謹ニテ
策ヲ陳シ第一策ヲ首トス然レテ事若ク機層ニ及
ハスハ第一ニ策ヲ止ルニ第一ニ策ノ在キハ兵家ノ尤
忌ム所 臣死スルニ

聖明ノ為ニ此下策ニ出ルコト能ハス昧死謹言

明治七年七月 陸軍中将兼陸軍卿 山縣有朋